

関東支部「秋の見学会」

見学会は、11月9日(金)～10日(土)の2日間、36名の参加であった。見学先は、第1日は、太陽誘電(株)玉村工場、東邦亜鉛(株)安中製錬所、信越化学工業・信越半導体(株)磯部工場、第2日は、豊順鉱業(株)応用粘土科学研究所と安中工場、片倉工業(株)富岡工場、藤岡窯業(株)、高井酒造の各工場と、群馬県立美術館・歴史博物館であった。今年も芝浦工大の木邑先生の主導によって盛沢山の工場を見学し、大いに勉強できて大変に有意義であった。

今回の最大の特徴は新旧産業を比較した見学であったことと思う。明治5年の操業である製糸場の片倉工業、昭和12年に会社を設立して電気亜鉛製錬を開始した東邦亜鉛、昭和14年ベントナイトを事業化した豊順鉱業など明治から昭和初期までに基盤を形成した産業であるが、その今日における変貌を見た。片倉工業は日本産業史の黎明期に建設された官営工場を受け継ぎ、以降は明治・大正・昭和を通じて政府の輸出振興の生糸産業の指導工場として永い110余年の任務を終わって3年前に廃業したことを伺った。今日の日本の工業の基盤を創造したことに敬意を表したい。東邦亜鉛は、取組んで20余年に及ぶ公害問題を解決し、家庭、自動車、事務機、電気の新しい要請の各用途部品などに不可欠な非鉄金属の生産を見ることができた。豊順工業では、土木建築工事用、農業増量剤、土壌改良剤、鋳

物砂粘結剤など最近に見る多分野にわたる応用の拡がりによって無限の可能性の夢を秘める素材と成長したベントナイトを実際応用例で見ることができた。

対比して戦後の先端産業のエレクトロニクスの見学は、セラミックコンデンサの太陽誘電とシリコンウエハーの信越半導体であった。太陽誘電では、プリント基板への自動挿入のため独自開発をした超小形アキシャルリードの円筒形コンデンサの生産ラインと、表面実装にのって進められ各種チップを可能とするチップ自動装着機の説明を聞いた。はげしく新規の商品を追い求め、上記の場合と違ってそのために輸入によらない国産新技術を開発する先端企業の姿を見ることができた。

例年の紅葉は暖秋により見れなかったが、予報の雨も磯部温泉宿泊中の夜中で済み、特に2日目は全くの秋空の中で妙義、榛名、赤城の上州三山と浅間山がくっきり浮かび絶好の見学日和であった。

末尾に、今後の見学会のために感想を述べたい。その第1は、見学先である。各実行委員の方々の大きな努力にも拘わらず信越化学・信越半導体は、いわゆるビデオ見学で終わった。今後も先端企業を入れるべきであるが、先方が望むことも理解して選定する必要がある。その第2は、無断で出発時間に遅れた参加者の場合である。聞くところによると本人は参加の初回も今回の第2回も遅れており、そのために実行委員の犠牲は大きく、また一般参加者も大変な迷惑をこうむった。たとえ弁解があっても、学会軽視も甚だしいということになろう。

(山本博孝、記す)



山岡信立取締役を囲んで(太陽誘電・玉村工場)